

主体的・対話的で深い学びに関する研究

校内研究への支援の在り方

－教員一人一人の授業改善につながる校内研究を目指して－

副主幹・指導主事	興水 美香	主査・指導主事	今村 恵美子
副主査・指導主事	廣瀬 雅美	副主査・指導主事	渡邊 信也
副主査・指導主事	萩原 義晃		

キーワード みんなわくわく校内研究 みんなが主役の校内研究 分析結果を理解し、明日の授業改善に生かす

I 主題設定の理由

今年度より、本センターが行う学校教育への総合的な支援の取組を「研究支援」、研究協力校を「研究推進校」と改称したが、これまで行ってきたセンター研究の趣旨や目的は変わっていない。そこで、小学校チームでは今年度も学校教育支援を目的とし、研究推進校と協同的に「授業づくり・学校づくり」を推進する実践研究を行っていく。

各学校では学校や地域の特色を生かした校内研究を推進している。しかし、教育課題が多様化・複雑化する教育現場において、校内研究の進め方に多くの学校が様々な悩みを抱えており、研究の成果が教員一人一人の授業改善につながっていないケースが見られる。そこで本研究では、支援の在り方を探るにあたり、教員一人一人の主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善につながる校内研究に着目していく。

小学校チームは、昨年度からの研究協力校（現研究推進校）である笛吹市立石和南小学校に加え、新たな研究推進校として北杜市立高根東小学校とも連携を図る中で研究を進めることになった。同一研究推進校で複数年にわたり協同研究を進めることで、より系統的・計画的な実践の構築の可能性を探ることを意図している。具体的な取組として、各校からの要望を踏まえ、本センターの機能を生かした各種学力調査の分析に基づく提案等を行い、研究推進校における校内研究の活性化を目指す。更に、研究内容を県下に広げ、各学校の校内研究の活性化につなげるとともに、各学校への有効な教育支援の在り方を探りたいと考える。

II 研究の目的

研究支援校からの要望に加え、本センターの機能を生かした各種学力調査の分析に基づく提案等が、研究推進校に対してどのような成果と課題をもたらしたかを検証することで、各学校の校内研究への支援の在り方を探る。

III 研究の方法

- ・校内研究の運営に関する連絡を密にし、管理職や研究主任と連携する。
- ・学習会、学習指導案検討、模擬授業、研究授業、研究会の講師となり、情報提供や指導・助言を行う。
- ・作成物を活用し、授業改善に向けた具体的取組につながる支援を行う。
- ・拡大校内研究会やセンター研究大会において研究の成果を発信する。
- ・検証の手立てとしてアンケートを実施し、教員の変容を把握する。
- ・山梨大学のアドバイザーの先生方から支援についてのアドバイスをいただく。

IV 研究経過

1 センター研究日

- 4月13日（水）オリエンテーション
- 4月21日（木）センター研究
 - ・研究計画の検討、支援内容の確認
- 5月17日（火）研究計画発表会
- 6月20日（月）センター研究
 - ・1学期の支援内容の検討
- 7月15日（金）センター研究
 - ・2学期の支援内容の検討
- 9月20日（火）中間発表会
- 11月15日（火）センター研究
 - ・3学期の支援内容の検討
- 11月18日（金）山梨大学連携教育研究会
- 12月20日（火）センター研究
 - ・センター研究大会、研究紀要の分担
- 1月16日（月）センター研究
 - ・所内発表会の検討
- 1月24日（火）所内発表会
- 2月7日（火）センター研究
 - ・研究紀要の検討
- 2月21日（火）センター研究発表大会

2 学校訪問

石和南小	高根東小
4月15日(金) ・委嘱状交付 ・打ち合わせ	4月18日(月) ・委嘱状交付 ・打ち合わせ
5月2日(月) ・学習会(自校採点)	7月11日(月) ・学習会(自校採点)
5月30日(月) ・学習会	9月2日(金) ・一人一実践授業
6月6日(月) ・学習指導案検討	9月27日(火) ・一人一実践授業
6月27日(月) ・研究授業・研究会	10月7日(金) ・一人一実践授業
7月12日(火) ・一人一実践授業	10月11日(火) ・一人一実践授業
7月26日(火) ・学習指導案検討	10月12日(水) ・一人一実践授業
8月23日(火) ・学習指導案検討	11月15日(火) ・一人一実践授業
8月25日(木) ・学習指導案検討	11月18日(金) ・一人一実践授業
10月12日(水) ・拡大校内研究会	11月30日(水) ・一人一実践授業
11月16日(水) ・一人一実践授業	1月19日(木) ・一人一実践授業
11月18日(金) ・一人一実践授業	
11月25日(金) ・一人一実践授業	
11月29日(火) ・一人一実践授業	
12月7日(水) ・一人一実践授業	

V 具体的な取組

小学校チームでは、2校の研究推進校を指定し、研究支援を行ってきた。それぞれの学校の実態と要望に沿った支援を行い、校内研究が活性化されるように努めてきた。本センターの機能を活用しながら、学校全体の授業力向上を目指し、教員一人一人の授業改善につながるように、また、年間を通して校内研究の目的が意識できるように支援を行った。その研究支援が「研究推進校」のニーズに合わせたものとなるように、学校長や研究主任との相談の上、支援の計画を決定してきた。

1 研究推進校のニーズに応じた柔軟な支援

(1) 授業力向上に向けた支援 ～高根東小学校～

高根東小学校は、推進校1年目ということもあり、どのような支援が有効であるかを丁寧に検討してきた。研究主任との打ち合わせを重ね、高根東小学校で継続している「主体的に学び共有し合う児童の育成」という研究テーマを軸に置き、支援計画を立てた。

第1回校内研究会にはセンター指導主事も参加し、センター研究や研究推進校としての具体的なイメージを全職員と共有した。7月には全国学力・学習状況調査(以下全国学調)の自校採点学習会を実施する中で、自校の課題を見つけ、2学期からの一人一実践の授業改善へとつながるよう支援を行った。2学期から始まった実践において、学習指導案(略案)づくりも含めた支援、当日の授業参観、参観後の指導・助言(休み時間等)を行い、職員の日頃の授業に対する悩みなども聞くことができ、充実した時間となった。これは、後に挙げるアンケート結果にも表れている。

(2) さらなる向上を目指した支援

～石和南小学校～

石和南小学校は、令和3・4年度笛吹市教育協議会の研究指定校となっており、校内研究テーマ「ともに考え 深く学ぶ 子どもの育成」のもと、今年度の公開研究会に向け、全教員の授業力向上への支援を必要としていた。

研究協力校1年目は、センターが支援することで学校が主体となって研究を進めた。研究推進校2年目は、管理職のリーダーシップのもと、今年度の校内研究の進め方が全職員で共有されていた。そのため、研究会では授業の具体的な様子を基に意見交流が行われ、教員一人一人がより積極的に参加できる校内研究となった。

石和南小学校は「ともに考え深く学ぶ」という児童の姿を目指し、「課題の明確化」「個の意見の可視化」「考えを深める意図的な問い」に重点を置き、研究を進めてきた。5月には「考えを深める意図的な問い」の効果的な活用について学習会を行い、6月に実施された研究授業から得られた成果と課題を生かして、10月の公開研究発表会を迎えた。授業後の研究会では参観者から「問い返しによって児童の思考を深める展開が見られた」「日々実践している成果が表れていた」という声

が聞かれた。

一人一実践では、センター指導主事が学校の要望を受け、当日の授業を参観し、授業後の休み時間等に指導・助言を行った。これは、本チームにおいてセンターがこれまで行ってきた研究支援から確立してきたスタイルである。通常の授業に指導主事が関わることで、学級担任は授業づくりに関する指導・助言が得られる。日常の授業改善が、学校全体としての授業力向上につながる取組となった。さらに、研究主任の発案により、実践が行われたその日の放課後に「ミニミニ研究会」と称した取組を行い、授業者が指導主事から受けた指導・助言についてなど、教員同士が意見交流を行うことができる場を設けた。これは、石和南小学校の校内研究のさらなる向上へとつながる取組となった。

(3) 拡大校内研究会の実施

拡大校内研究会の実施を通して、研究推進校は、他校や異校種の教員と討議し、研究がさらに深まるようにしている。センターは、校内研究への支援の様子を発信し、県内の各学校の校内研究推進に資する機会としている。

今年度は、石和南小学校が笛吹市教育協議会研究指定校公開研究発表会として実施したものに、センターとして下記のねらいをもって支援した。

ア 授業づくり

「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」に基づいて、授業者や学年・ブロックの教員とセンター指導主事が協同して学習指導案検討を重ねたり、授業者が行う模擬授業に参加して構想を練り上げたりした。昨年度同様、今年度も予想される児童の反応を入れた板書計画を立てることで、授業展開の具体的なイメージをもたせ授業づくりを進めた。

イ 新研究主任研修会の現場研修としての役割

新研究主任の現場研修として、研究推進校が実施する拡大校内研究会への参加がある。新研究主任は授業内容を討議することに加え、研究会の進め方を研究推進校から学ぶことができた。また、笛吹市の教育協議会の指定ということもあり、他地域の教諭との交流をもつ中で、様々な視点で意見を交換することができた。

2 分析結果を授業改善に生かす

(1) 自校採点の実施

本センターでは、以前より、全国学調実施後に自校採点を行い、各学校での授業改善に活用することを推奨している。小学校チームは、令和元年度より、研究協力校において、自校採点を校内研究に位置付け、授業改善の取組につながるよう支援してきた。今年度も、各研究推進校は、令和4年度の全国学調の自校採点及び分析を行った。石和南小学校では5月の校内研究会で、高根東小学校では7月の校内研究会で、全教員が国語・算数調査の自校採点を行った。その際、センター指導主事は採点のポイントを示したり、教員からの疑問に答えたりした。

自校採点を行うことによって、全国や山梨県などの全体的な結果の報告だけではみえてこない、目の前の児童の実態が明らかになる。また、採点することにより全国学調の出題意図が把握でき、そこから児童にどのような資質・能力を身に付けさせることが求められているのかを知ることができる。

両校において、自校採点を行った成果として、自校の児童の学習状況を分析・把握し、課題を見だし、共通理解を図る機会となったことが挙げられる。これにより、全教員が共通認識をもって校内研究に参加し、学校全体で授業改善に取り組むことができる。



3 授業研究会に向けての支援

2年目の研究推進校である石和南小学校では、10月に授業研究会を行った。研究推進校への支援としてセンター指導主事が関わったものは、第1学年の算数科、第4学年の道徳科である。

(1) 算数科における支援の実際

第1学年では、算数科の測定領域「どちらがおおい」の単元で授業研究を行った。研究支援とし

て、指導案検討や模擬授業に算数科のセンター指導主事が参加し、指導・助言を行った。

ア 第1回指導案検討会（7月26日）

第1回の検討会では、授業者の指導案に沿って課題や悩みを共有し、よりよい授業研究を進めるために活発な意見交流が行われた。特に重点が置かれたのは、「本時をどこに設定するか」と「指導・評価計画」についてである。

低学年ブロックでは、体積を間接比較の方法で比べる第2時と、任意単位による比較の方法で比べる第3時のどちらを本時として設定するのか悩んでいたが、「広がりを問う」ことに重点をおいていることや授業者の指導意図から、第3時を本時として授業研究を進めていくこととなった。また、指導と評価の一体化を意識し、単元を通してどのような資質・能力を身に付けさせたいのかを明らかにした評価計画の作成について共通理解を図った。

センター指導主事は、実践事例を紹介したり、指導案の書き方や評価計画の作成等について、指導・助言を行ったりした。

イ 第2回指導案検討会（8月23日）

第2回の検討会では、授業の細案に沿って、具体的な発問やワークシート、評価等について協議・検討を行った。特に、どの場面でのどのような「考えを深める意図的な問い」を行うのかに焦点を当て、児童の思考過程を予想しながら検討を行った。

本単元に関わり、平成29年度の全国学調で「任意単位による測定について理解しているかどうか」を問う問題が出題されている。この問題の正答率は70.8%であった。報告書には、「既習の量の比較や測定方法を活用すること」と、「異なる種類の量において共通する比較や測定の方法について実感的に理解できるようにすること」が大切であると示されている。そこで、センター指導主事は資料提供を行い、既習の長さの学習を活用し、共通点を実感できるような工夫の大切さについて、指導・助言を行った。

ウ 模擬授業の様子

授業者の意向により、石和南小学校の教職員と算数科のセンター指導主事2名が児童役として参加し、事前に模擬授業を行った。

模擬授業では、参加者が主体的に取り組み、様々な児童の反応を考え、表現したことで、授業展開の細部にも課題を見だし、検討することができた。また、発問や板書の仕方、ワークシートの形式などに対して多くの意見や助言が出された。

さらに、模擬授業を行うことにより、低学年ブロックの教員は具体的なイメージをもつことができた。そこで、より考えを深めるために、「広がりや問う」よりも「矛盾や葛藤を問う」ことに重点をおき発問を構成することとした。

エ 授業について（10月12日）

研究授業では掲示物を活用し、「長さ」や前時までの学習を想起させながら課題把握を行った。参加者のアンケートに、『「長さくらべ」で学習したことをもとにして本時が指導されている」という記述が見られた。このことから、「既習の量の比較や測定方法を活用する」授業づくりを行うことができたといえる。また、この活動を通して、「異なる種類の量において共通する比較や測定の方法について実感的に理解できる」ことにつながると考えられる。

実際の活動場面では、具体物を用いた体験的活動により、児童は意欲的に学習に取り組んでいた。アンケートには、「実際に体験することで身になった」「自分事として取り組めた」という記述が見られた。第1学年で水を扱った体験的活動を行うことに慎重な意見もあったが、児童の主体的な学びを実現することができたといえる。

全体での学習活動の場面では、授業者は「問い」を意識して授業を進めていた。実際に、授業者が「何で」「どうして」と問うことで、根拠を明確にしたり揺さぶりをかけて考えを深めたりすることができた場面が見られた。そのため、アンケートには、「先生が何度も問いかけ、対話しながら授業が進んでいた」という記述が見られた。このことから、「考えを深める意図的な問い」を取り入れた授業を実践し、「ともに考え深く学ぶ子ども」の育成を図ることができたといえる。

（2）道徳科における支援の実際

第4学年では、教科書教材「わかってくれてありがとう」を用い、内容項目「B相互理解、寛容」において「相手の意見も大切に」を主題とした授業研究を行った。研究支援として、指導案検討と

拡大校内研に道徳科のセンター指導主事が参加し、指導・助言を行った。

ア 第1回指導案検討会（7月26日）

第1回の検討会では、石和南小学校の中学年ブロックの教員と道徳科のセンター指導主事が協同して、拡大校内研の授業に向けての指導案検討を行った。ここでは、授業者の指導案説明に沿って、ブロック内で課題を共有し、活発な意見交流が行われた。ブロックの一人一人が、意欲的に意見を述べ、ブロックの教員主体で検討が進められた。

「校内研との関わり」の検討では、考えを深める学習過程である「石和南小スタイルの授業」との関わりを確認しながら、具体的な手立ての検討を行った。これまで積み重ねてきた研究とのつながりについて、より深く共通理解することができた。

検討によって、「主題設定の理由」では、教材の活用に関わる登場人物の考えや行動の示し方が、より明確になった。また、「展開」では、アンケートや話し合い、評価等について、検討したことを生かして指導案修正を行うこととなった。

センター指導主事は、検討事項として出された指導案の書き方や教材の取り扱い方、各学習活動の意義、評価の視点等について、指導・助言を行った。併せて、次回に向けて資料提供も行った。

イ 第2回指導案検討会（8月25日）

第2回の検討会では、授業者の細案に沿って検討が進められた。

アンケートの項目については、導入において自分との関わりで考えることができるように、また、展開や終末での効果的な活用ができるように検討した。教材提示の方法については、児童の考える視点を明確にできるように検討した。展開については、児童の多様な意見を予想した細案に基づき、ねらいにせまるために深めていきたい意見を検討した。センター指導主事は、授業についての指導・助言、資料提供とともに、授業外の取組として、学校生活の中での「相互理解、寛容」の実践場面の意識化、話し合いの活発化について、指導・助言を行った。

2回の指導案検討会は、常に児童の実態と照らし合わせながら進められ、さらに、検討会後は、ブロックの教員によって、板書計画と終末につい

ての再検討会が行われた。板書計画は、昨年度の取組を生かし、予想される児童の反応例を実際に板書して検討した。修正後の指導案については、メールと電話対応により、センター指導主事が指導・助言を行った。

ウ 授業について（10月12日）

授業では、課題が明確に示され、児童同士、児童と教師が認め合う雰囲気をお大切にする中で、一人一人の児童がよく考えている様子が見られた。また、「どうして」「誰が」等の授業者の問い返しによって、児童の考えがつながり深まっていく様子が見られた。

参観者のアンケートには、「教材を読む前に、登場人物の説明や考えてほしいことを伝えた方法が印象に残った」「児童は、視点をもって聞くことができたと思う」「授業者が、児童の意見や考えを大事にして授業を進めていた」「児童が積極的に発言し、意欲的に授業に参加していた」「児童の意見を軌道修正したり、深めてねらいにつなげたりするためには問い返しがお大切だと感じた」のような記述が多く見られた。

（3）研究会におけるセンター指導主事の支援

研究会では、研究討議に先立って「対話リフレクション」を行った。授業者の意図をメンター役の教員と問答形式で示すことで、その後の研究討議の視点が明らかになり、討議の活性化につながった。討議では、特に「考えを深める意図的な問い」に十分な時間を設定することができた。成果と課題について積極的な意見交流が行われ、一人一人が主体的に参加できる研究会となった。研究会での指導・助言は、センター指導主事が行った。指導案検討から関わってきたので、授業者の意図を踏まえながら指導・助言を行うことができた。

ブロックだけでなく全校で研究の方向性を共有し協力して実施した拡大校内研究会は、研究推進校の取組を広く発信する機会となった。

4 作成物の活用

研究推進校の校内研究を支援するにあたり、これまでの研究で作成した資料である「授業研究の進め方」と「明日の授業に生かすシート」を今年度も活用した。さらに今年度は「先生たちの学びの充実に向けて」と「授業づくりメイキングシート」を作成し活用した。

* 「授業研究の進め方」

「明日の授業に生かすシート」 (R3 研究紀要参照)

(1) 「明日の授業に生かすシート」とは

このシートには、「授業後研究会」で明らかになった成果や課題、改善策を記述する項目、それを実際に自分の授業にどのように生かすかを考え記述する項目、学校や学年で検討していきたいことを記述する項目が設けられている。以上のような項目を教員一人一人が継続して記述することにより、それぞれの具体的な授業改善、次のPDCAサイクルにつなげることを意図している。

ア 研究推進校での活用例

研究推進校では、年度始めの校内研究会において、上記作成物の説明を行った。「授業研究の進め方」の中で、特に意識したい点として、研究授業を自分自身の授業に生かしていく視点をもつことを挙げた。そして、その実践のために「明日の授業に生かすシート」に記述することが大切であることを伝えた。記述は研究授業後等に実施された。

以下は、「自分の授業にどのように活用していくか」についての記述の一部である。

問いによって児童の考えをつなぐ。
児童のつぶやきを板書する。
児童が自ら「考えたい」と思える課題を設定する。

全体的に、児童の考えをつなぐことに着目した記述が多く見られた。そして、その方策として、「板書の構造化」や「効果的な課題設定」等が挙げられていた。各自がこれまでの自分の実践を想起しながら授業を参観し、「明日の授業に生かすシート」を活用して授業を振り返ることで、児童の考えを引き出し、それらをつなぐことで授業を展開することの有効性と難しさを再認識している様子がうかがえた。また、児童の考えをつなぐ方策として、構造化された板書や魅力的な課題設定等の具体的なイメージづくりにつながっていることもうかがえた。

イ 個々の授業に生かす

前述のように、「授業研究の進め方」で共通理解を図り、「明日の授業に生かすシート」を活用することで、研究の方向性を共有し、研究授業で明らかになった成果や課題を受けて個々の授業にどの

ように生かすかを考える様子がうかがえた。それに加えて、長期的に校内研究に関わることで、同一教員の変容をみることもできる。本シートの活用から実践へ反映させた一人の教員の事例を以下に示す。教員Aの令和3年度の本シートには、次のような記述が見られた。

授業研究で明らかになった「有効な手立て」や「改善策」は何でしたか？

- ・身近な題材からの課題設定は有効であった。
- ・友達の考えから学ぶことの大切さを改めて感じた。

明日からの授業や一人一実践等で、どのように活用しますか？

- ・導入を工夫して、見通しをもたせるとともに、必然性のある課題設定につなげる。
- ・授業は「他者の考えを解釈する場」という視点をもち、多様な考えに触れさせる場面を設定する。

授業研究を通して、自身の実践を振り返り、「他者の考えを通して再考する場面設定の工夫の必要性」を感じ、自身の授業改善に向けた課題意識を明確にすることにつながっている様子がうかがえた。さらに、「児童の生活と関連づいた課題の設定」や「課題の明確化による必然性のある活動の実施」等、その後の実践につながる具体的な方向性を見いだすことにつながっていた。

これに対して、令和4年度の本シートには、次のような記述が見られた。

授業研究で明らかになった「有効な手立て」や「改善策」は何でしたか？

- ・意図的な課題設定・前時の板書の提示
- ・板書の構造化→学習のつながりが意識できた。

明日からの授業や一人一実践等で、どのように活用しますか？

- ・問いによって児童の考えをつなぐこと。
- ・授業者として学習のつながりを意識すること。
- 児童も学習のつながりを意識できるよう工夫する。

令和3年度の授業研究の中で主として着目していた「課題設定」について、令和4年度も授業改善の方策の一つとして引き続き意識していることがうかがえる記述が見られた。それに加えて令和4年度は新たに「つながり」ということに着目している様子がうかがえた。教員Aが、授業研究及び本シートでの振り返りを通して、より効果的な

課題設定のために、設定した課題の思考・判断・表現場面における「児童の考えのつながりの大切さ」や、質の高い課題設定のための「各時間のつながりを意識することの必要性」等の新たな視点を見いだすことにつながっている様子がうかがえた。教員Aは、昨年度から継続して、自身の授業改善に向けた明確な視点をもった上で、その後の授業研究会に臨んできたからこそ、新たな授業改善の視点をもつことができたのではないかと考えられる。また、本シートが継続した授業改善の意識の醸成の一助になったことも考えられる。

このように、教員の意識の変容についても見取り共有することは授業改善への一助になったり、校内研究支援の有効性の検証につながったりする可能性が考えられる。

ウ 「明日の授業に生かすシート」の活用の有効性

校内研究支援の視点から、本シートの活用の有効性を3つに整理する。前述のように、昨年度までと同様に、学習会や研究授業、授業研究会から、教員が学びや気づきを得ていたことを確認することができた。また、その学びや気づきが教員一人一人の授業改善に結び付いているか、どのように具現化されているかを知ることが可能であることがわかった。さらに、個々の教員の記述について継続的に見ていくことで、個々や学校全体の授業づくりへの意識や具体的取組の変容についても把握しながら支援を行っていくことも可能であることもわかった。

研究推進校にとって、本シートの活用は、研究授業を単発で終わらせるのではなく、その後の授業改善につなげるための有効な手法の一つとなっている。本シートは短時間で記述できることに加え、研究主題等を問わず、各学校の校内研究に取り入れやすい。過去に活用した学校では、その後の校内研究で継続して活用したり、記述内容を全校で共有したりするなど、各学校において自発的な試みが行われているという報告も受けている。各学校の実態に応じて柔軟に実施方法を工夫することができるので、研究推進校以外の小学校においても有効活用が期待できる。

(2) 「先生たちの学びの充実に向けて」とは

教員自身が校内研を通して学んだことを捉え直し、成果と課題を明確にすることでこれからに生

かしていくことを目的としたシート(資料1参照)である。

年度始めに、学校教育目標や研究主題を踏まえて、教員自身がどのようなことに取り組もうとするかを明記する。そうすることで、自身の課題を明確にし、校内研究に対して主体的に取り組むことを期待している。そして各自が掲げた課題に対して、日々の授業や児童との関わり、校内研究や研修会などを経て、年度末にはまとめを行う。まとめでは、「Keep」(成果が出ていて継続すること)、「Problem」(解決すべき課題)、「Try」(これから取り組んでいくこと)の「KPT フレーム」を取り入れ、3つの観点で振り返りを行う。「Try」に関しては、「Problem」の課題解決だけでなく、「Keep」に挙げた成果を継続することも盛り込んでいく構成にした。このシートを活用することにより、年間を通した教員自身の学びが深まるものと考えられる。

ア 研究推進校での活用例

研究推進校には、本シートの活用意図や活用方法について説明を行った。それぞれの教員が年度始めに自身の課題を記述し、年度末に振り返りを実施した。

以下は、年度始めに記述した「研究主題に向けて、どのようなことに取り組もうと考えているか」についての記述の一部である。

考えを深める意図的な問いを日常的に取り入れていきたい。
課題を明確にすることで、子供が考えをもてるようにする。
子供が比較しながら自分の意見を伝えられるよう板書を構造化する。

これらの記述は、学校で共有している具体的な手立てと工夫に関する内容である。

年度末に記述した「まとめ」においては、年度始めに自身が掲げた課題に対して成果が出ている記述が多く見られた。一方で、解決すべき課題の項目には、校内研究や日々の実践を通して、新しい課題が出てきた様子が多く記述されていた。これから取り組んでいくことに関しては、多くの教員が記述した成果と課題を踏まえ、これからに生かしていくことを具体的に記述していた。

「先生たちの学びの充実に向けて」のシートを活用することで、自身の課題を明確にし、日々の実践を通して、自身の学びを振り返ることができた。さらに、これから取り組むことを明記するこ

とで意識を高めていくことができた。

資料 1 :
先生たちの学びの
充実に向けて

年度始め
各自の目標等

まとめ
KPTシートを使用
してのふり回り

(3) 「授業研究メイキングシート」とは

授業は、単元の目標、教材研究、授業の流れ、評価など様々な要素を考えながら構成される。授業者は、それまでの経験の中で蓄積された知識を用いて様々な文献や自身で得た情報を基に授業を構想していこう。同じ学校にいる教員同士が授業に関して培ってきたもの（情報）を共有することができ、また、それを自身の授業に生かすことができたらどうであろうか。経験を積んだベテラン教員と経験が浅くても新しい視点で授業の組み立てを考えることができる若い教員、そして中間点にいるミドル教員。教員同士が「つながる」ことを目的とし、この「授業メイキングシート」を作成した。今年度は作成して1年目なので紙面での活用を中心とし、まずは実際に書いてみて授業の組み立てに生かすと共に、それを教員同士で共有することで、

教師自身や学校の財産となるように、活用することを進めてきた。



ア 研究推進校での活用例

「授業研究メイキングシート」は個人の授業研究から職員全体へ学びをつなぐためのものである。教科の指定はなく、一人一実践で行った授業に関するシートを作成した。

シート（資料2参照）は、本時のねらい、この授業の山場となるところ、授業づくりのための参考図書や参考資料、本時の評価の4点をまとめられる構成になっている。

資料 2 :
授業研究
メイキングシート

授業の山場

使用した
参考図書等

本時の評価

作成されたシートを見ると、授業の山場を確認することで、授業者が1時間の授業のどの部分に重きを置くのかがわかりやすく（例：実験から3つの働きを見いだすところ、計算の仕方を順序立てて説明するところ等）また、使用した参考図書や資料（例：富士山の写真を使用したの合唱指導、ゴムひもを使用したの器械運動の指導等）などについて詳細に記述されていた。

授業で活用した具体的な事物が記載されていることや授業の山場がどこであるかといった内容を共有することで、自分が同じ授業を行うときの参考になり、活用することができると思われる。

また、本時の評価についての項目も設定した。指導案を作成するときにより詳しく書いていくものではあるが、本時のめあてと評価を一枚のシートにまとめることで、指導と評価の一体化にもつながる。これは、今年度初めて取り組んだ活動である。実際に取り組まれた推進校から得た課題を生かしながら、来年度へ向けての改善につなげたい。



5 アンケートの実施

本研究の検証の手段として、2校の教員を対象に、12月にアンケートを実施した。

(1) アンケート項目（高根東小学校）

- ①校内研における学習会等の実施について（センター研究推進に関する学習会、自校採点に関わる学習会）
- ②校内研における研究授業の実施について（一人一実践の授業提案）
- ③振り返りシートの活用について（「先生たちの学

びの充実に向けて」、「授業研究メイキングシート」)

④校内研究への取組の姿勢（主体的に取り組んだか）について

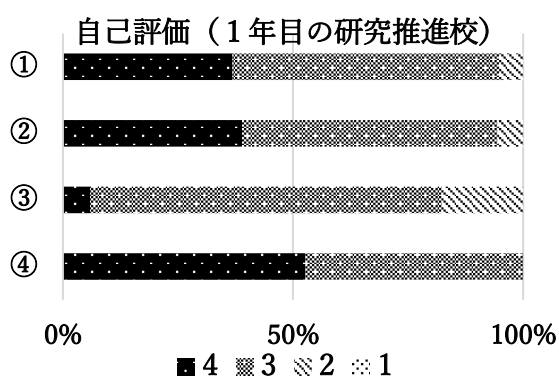
⑤センター研究に関する意見・感想

※①～④は充実度・満足度の自己評価尺度として

「4：高い」「3：やや高い」「2：やや低い」

「1：低い」で評価し、⑤は記述で回答

(2) アンケート結果（高根東小学校）



⑤記述回答より

- ・教科ごと、実践を積み重ねてきている方々の話を聞くことができる。一人一実践となれば、更に専門性を深めていけると感じる。
- ・一実践授業後に指導や資料の提示がありよかった。
- ・授業に対して指導されたことを生かして進めていきたい。自分でよいと思って作っている指導案だが、指導されることで改めて研鑽、研究の大切さを感じる。
- ・何度も来校していただく事で、大変質の高い研究となった。

(3) アンケート項目（石和南小学校）

①校内研における学習会等の実施について（自校採点に関わる学習会）

②校内研における研究授業の実施について（一人一実践の授業提案，センター校公開研究発表会）

③振り返りシートの活用について（「明日の授業に生かすシート」「先生たちの学びの充実に向けて」、「授業研究メイキングシート」）

④校内研究への取組の姿勢（主体的に取り組んだか）について

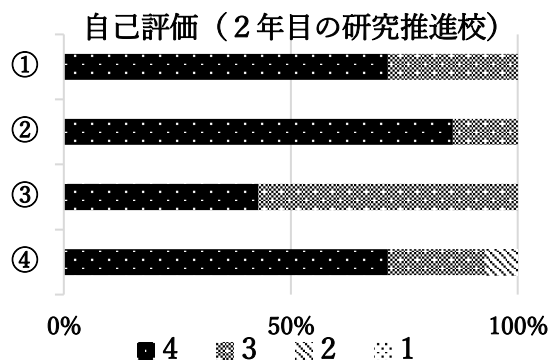
⑤センター研究に関する意見・感想

※①～④は充実度・満足度の自己評価尺度として

「4：高い」「3：やや高い」「2：やや低い」

「1：低い」で評価し、⑤は記述で回答

(4) アンケート結果（石和南小学校）



⑤記述回答より

- ・昨年度からの継続研究により更に学びが深まった。研究主任を中心に学校全体で、子供たちのために手立てを講じたり、授業について考えたりと、非常に充実した研究となった。
- ・明日に生かすシートは、校内研の内容を検証授業後振り返り、そこで出た成果と課題を見直すよい機会となった。
- ・学習会等の機会を用いながら、子供たちの学びの現状などを知り、更に私たち自身が学んでいくことにつながった。
- ・一人一実践からセンター指導主事に的確な指導をしてもらえたことが、大変勉強になった。

VI 今年度の研究の成果と課題

1 成果

(1) 研究推進校における成果

研究推進校が挙げた成果の一つに、互いの授業から学んだことが挙げられる。

2校において、全学級担任が研究授業もしくは一人一実践に取り組んだ。その結果、多くの教員が学習指導案づくりに関わり、担当学年以外の学習内容を考える機会を得た。また、授業を見る機会や研究会に参加する機会が増えた。

教員のアンケートからは、「研究主任を中心に学校全体で、子供たちのために手立てを講じたり、授業について考えたりと、非常に充実した研究と

なった」「校内研が充実したものとなるように、研修や授業についての指導、助言をしてもらいよい学びの時間となった」「振り返りシートのおかげで、学んだことや今後取り組んでいくことが明確になった」と、学びや授業力の高まりを実感する様子が見えられた。

研究授業や一人一実践に関わる取組から、教員一人一人の授業改善につながり、授業づくりへの意識が高まった。さらには、学校全体の授業力向上につながり、「みんなが主役の校内研究」となったのではないだろうか。

(2) 有効な支援

研究推進校への有効な支援として以下の2点が挙げられる。1点目は、研究推進校のニーズに合わせた研究支援である。2点目は、研究授業から振り返り、個々の授業につなげる支援である。

これらは、校内研究の活性化につながる汎用性の高い研究の流れといえる。これらに取り組むことにより、教員一人一人の授業実践につながる、持続可能な校内研究になるであろう。

一方、指導主事が年間を通して、校内研究への支援を行うことは、研究主任として心強いと感想をいただいた。研究の進め方について気軽に相談でき、学習会や研究授業において、専門的な指導助言や情報が提供されることにより、効果的で充実した研究を展開していくことができたという話をうかがった。このように、指導主事の継続的な関わりは校内研究や研究主任の支えになったといえる。

2 課題

以下の2点が課題として挙げられる。

1点目は、校内研究に対する各学校の課題をしっかりと汲み取り、推進校の校内研究の主題を柱にした支援をしていくことである。そのために、年度始めや年間を通しての学校との綿密な打ち合わせの機会をなるべく多く確保していく。

2点目は、研究推進校が得た成果や有効な支援を県内の学校に広めることである。これまで、拡大校内研究会の実施や各種研修会において紹介する機会を位置付けてきたが、より多くの場で周知できるよう、効果的な方法を探っていく。

3 来年度に向けて

上記の課題解決に向け、研究推進校とより一層共通理解を図り、校内研究への支援を進める。

- ・新年度が始まり、学校において校内研究のスケジュールが確定する前に、管理職や研究主任と打ち合わせを行う。
 - ・1学期中に各種学力調査の分析方法を学ぶ学習会を位置付け、以降の校内研究に生かしていけるようにする。
 - ・各種振り返りシートを活用し、教員の授業改善への取組につなげる。
- これらの取組を通して、県内小学校の校内研究の活性化に寄与していく。

【引用・参考文献】

国立教育政策研究所 平成 29 年
全国学調 報告書 小学校 算数

【研究推進校】

北杜市立高根東小学校 校長 有賀 望
笛吹市立石和南小学校 校長 坂野 修一

【山梨大学連携教育研究会アドバイザー】

山梨大学
客員教授 蘆原 桂 客員教授 河野 瑞穂
客員教授 樋口 和仁 教授 古屋 啓一
准教授 中込 繁樹 准教授 角田 大輔

【総合教育センター研究アドバイザー】

次長 小尾 俊彦
主幹・指導主事 三枝 ゆかり